

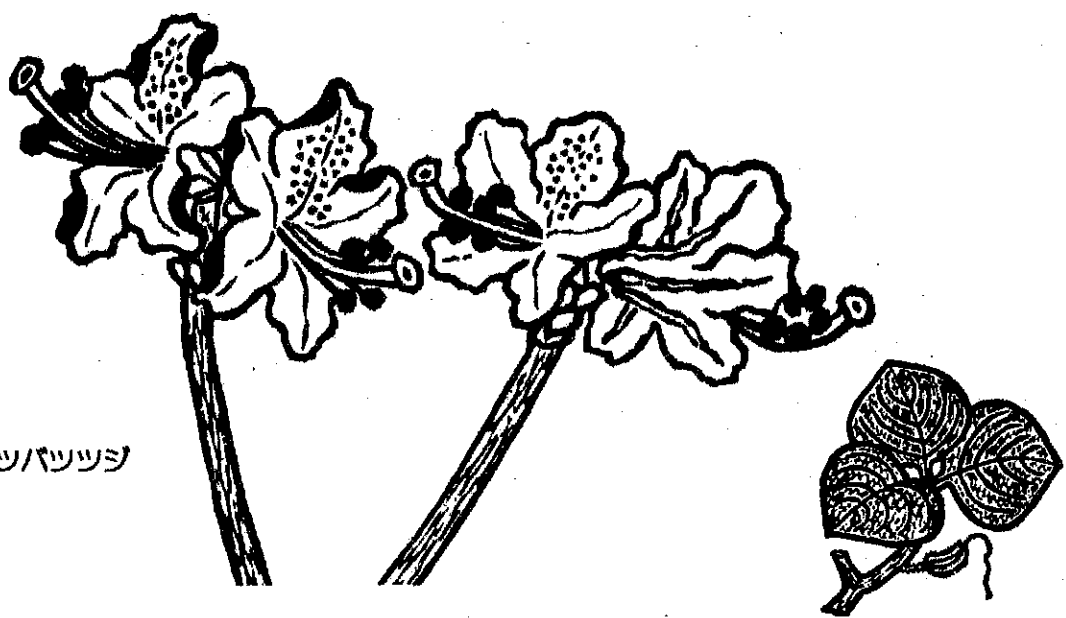
奥多摩の春



奥多摩

《第25号》

平成24年4月15日
奥多摩観光協会



ミツバツツジ

木版画 安藤修二

～ 季節 だより ～

今年の奥多摩は、遅い春を迎えました。梅も桜も10日ほど遅れて咲きましたが、一気に暖くなり、山々もいつもの賑わいを取り戻しています。

奥多摩で春一番の樹の花は？と尋ねられたら、あなたなら何と答えますか。アブラチャン、ダンコウバイ、マンサクなどでしょうか。町の木に指定されているミツバツツジは、イチバンツツジの呼び名があるくらいですから、ツツジの仲間ではいち早く咲き始めます。地元では、ムラサキツツジとも呼ばれ、春一番を知らせてくれる花として親しまれています。

かつては、当り前のように山中で見かけました。一時期乱獲されましたが、まだ岩場などで自然状態で見ることができます。今では、古くからある家の庭で何十年も前に植栽されたものを見かけますが、新たに山の斜面などに植えられたものは挿し芽や挿し木から育てられた園芸種で、いわゆるクローンです。

ミツバツツジは、名前の通り三枚葉のツツジですが、春一番に花を付けるとき、まだ葉はほとんど開いていませんし、他の木々が葉を出さないうちに咲き始めます。

三枚葉のツツジで頭にトウゴクとかサイゴク、あるいはナンゴクと付くのは、それぞれ東国、西国、南国という意味で生育している環境で種類が異なります。

ミツバツツジの雄しべは5本。トウゴクミツバツツジ及び〇〇ミツバツツジと名が付くものは雄しべが10本。ここが見分けのポイントです。

ちなみに、ツツジの語源は諸説あり、定説はありませんが、漏斗状の花が次から次へと咲くことから「続咲木(つづきさきぎ)」がつまったとする説になんとなく惹かれます。漢字で書くと躑躅(テキョク)。躑躅とは、あがく、あしづみするということ意味で羊がツツジの葉を食べると中毒してあがき苦しむからだそうです。一般にツツジ科は、有毒なアルカロイドを含むものがありますが、猛毒ではないとされています。ミツバツツジは有毒植物です。

奥多摩でミツバツツジの花を見るときは、川井駅から大丹波川に沿う大丹波集落がお薦め。4月中旬、青木神社から古里中学校方面へ時間をかけてのんびりと歩いてみてください。

(岡崎 学)

～ 赤 ぢ っ せ え ～

鉄五郎新道を経て大塚山

コース: 寸庭橋～大塚山～丹三郎～古里駅
開催日:平成24年6月20日(水)

古里駅から大塚山へは、丹三郎尾根から登るのが一般的ですが、今回は鉄五郎新道を経ての登山です。

古里駅前の国道411号線(青梅街道)を奥多摩方面へ進み、福音教会を過ぎたところで、左方面に下る道に入ります。多摩川に架かる寸庭橋を渡り切った先で、右の階段を登ります。

次の分岐点で左に大塚山方面へ行き、墓地を右に見て寸庭川を渡ると、ここから本格的な登山道が始まります。

清流の心地良い音を耳にしながら登山道を進みますが、右下は急斜面、道は細く荒れており、また滑りやすく油断できません。

駅より約60分で金毘羅神社に着きます。ここには、4月中頃にはヒカゲツツジがひっそりと淡いクリーム色の花をつけています。神社の下は、岩

登りのフィールドとして知られている越沢バットレスです。

ここから平沢山へは60分、さらに大塚山へは30分ほどですが、途中、道が狭く、急登、岩場、さらには滑りやすい場所もあり、細心の注意が必要な尾根です。電波塔が見えると、大塚山へはもう少しです。電波塔の右側の細い道を進むと大塚山山頂です。山頂は展望も良く、ベンチもあるので、お弁当を広げるにはふさわしい場所です。

帰路は、大塚山から①丹三郎尾根を経て古里駅、②御岳ビジターセンターの先から大檜峠を経て鳩ノ巣駅、③御岳山からケーブルカーとバスを乗り継ぎ御嶽駅など、体力に合わせ、いろいろ選べる事が出来ます。

この大塚山までのコースは、登山をする人も少なく、静かな尾根道ですが、注意が必要な箇所も多いので、単独登山は避けて、慎重な登山を心がけてください。
(沖倉慶子)

～ 行 っ て 赤 た ゃ ゃ ～

奥多摩むかしにみちに春を探す

梅の花がやっと咲き出したある日、奥多摩むかしみちに行ってきました。

駅を降りてすぐに左折し、青梅街道に出て右折。ほどなく行くとむかしみちの入口看板があり、そこを右に、すぐに左に羽黒坂を上ります。今日初めての坂なので、フーフー。この道は、氷川村から小河内村に至る旧青梅街道。

しばらく行くと、小河内ダム建設用軌道の名残りのレールを横切ります。振り返るとトンネルも見えます。建設工事中には、この場所に踏切番がいたとのこと。

道脇のお地藏様では、里の人が花の水替えをしたり、お賽銭を集めてユニセフに送っているという話も聞かれます。

タチツボスミシなどが咲き、キブシがまだ青い蕾のまま、ヤマブキの芽吹きはもうすぐ。

サイカチギは棘を樹いっぱいにとまとい、この辺りからダンコウバイの花の黄色がきれい。コリワサビの真っ白な花、エイザンスミシのピンク色、ミヤマキ

ケマンは草丈が短く咲いて、テンナンショウの仲間も1本だけ頭をのぞかせていました。

所々にフサザクラの赤い花が。今年は寒かったので、今頃フサザクラの花が見られるのかしら。崖の目の高さ辺りにジウニヒトエの花が咲いていましたが、見つかるかしら。

人ひとりが通れるほどであった狭い旧道では、多くの馬が谷に落ちたようで、その場所には、供養のために馬頭観音が祀られていました。馬の水のみ場には、「東京府」の文字も。ここには茶屋もありました。

新緑の頃には程遠い状態の中、ユキヤナギがきれい。ウラシマソウの咲く急斜面は工事で整備されて、もう花は見られないかも。

消防訓練塔がある広場(道所分校跡)には歌碑があります。明治6年にここを訪れた川合玉堂は、中山集落を見上げて、いつかあそこに住んでみたいと、歌を残しました。

最後の急登を登ると青目立不動尊休み処につきます。ここのゆでまんじゅうがお勧め。ここから奥多摩湖を一望し、バス停に向いました。(原 明子)

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その23 ～

「皇太子殿下と奥多摩」

今年の冬は寒かった。私は雪国生れなのだが寒さにはあまり強くない。例年雪山やアイスクライミングなどに何度か出掛けて行くのだが、今シーズンは雪の雲取山に何度か登っただけで、奥多摩以外の山には出掛けなかった。

故郷の山形県小国町あたりでは雪が3メートルも積もっており、「じっとして春を待つしかない」と、友人の便りには書いてあった。

都心などに比べれば、奥多摩の春も例年遅いのだが、今年の春は特に遅い。青梅マラソンのころになると、日向和田あたりの早咲きの梅がちらほらほころび始め、ヤマメ解禁の声を聞くと「ああ、奥多摩にもやっと春が来るか」と感慨に浸るのだが、今年は3月に入ってもまだ雪がちらつき、梅のつぼみも堅いままだ。

「皇太子さまは2月23日、52歳の誕生日を迎えられた」と新聞に掲載された。皇太子殿下は「登山が一番の趣味」とおっしゃっている。日本の山は富士山をはじめ、北は北海道の利尻山から、南は鹿児島県の開聞岳まで、百数十回の山行を重ねられ、はたまた海外の山にまでその足跡を印されておられる。

皇太子殿下の山歴は古く、山の情報誌「山と溪谷」や「岳人」などに載せられた殿下の「主な山行記録」を見ると、昭和40年の夏、殿下がまだ5歳のみぎり、今上天皇が皇太子であられた頃、その父君に連れられて軽井沢の難山に登られたのが初めての登山であったことを記録に書いておられる。

奥多摩の山域は、皇太子殿下がよく通われている貴重な登山フィールドとなっており、青梅署管内の登山は昭和52年、殿下まだ学生の折、今は廃道となっている日ノ戸沢林道から鷹ノ巣山に登られたのが最初であった。高尾署、五日市署管内の山と、山梨県ではあるが、東京都の水源林となっている飛龍山、笠取山などを含めると現在まで約20回の山行を重ねられ、主立ったほぼ全ての山頂を踏まれている。そして平成6年の高水三山と平成7年の雲取山には妃殿下、雅子さまも同行なされておられる。

私が山岳救助隊員として、初めて皇太子殿下と奥多摩登山の警衛に当たったのは、平成4年のまだ雪の残る蕎麦粒山であった。川苔谷の細倉橋から入山し、踊平、日向沢の峰、蕎麦粒山頂、三ツドッケ経由で日原に

下山した。殿下もまだ独身であられたから、百尋ノ滝で憩う若々しい爽やかな笑顔が印象に残っている。

平成16年9月、皇太子殿下は再び鷹ノ巣山に登られた。晴れ渡った初秋の山頂で昼食後、はじめて殿下よりお言葉を頂いた。以前私が上梓した「奥多摩登山考」を、雲取山荘の新井信太郎さんを通じて殿下にお送りしていたので、まだ殿下が歩かれていない長沢背稜についてのお尋ねがあったのだ。私は「長沢背稜は長い尾根ですので、日帰りでは無理とされます。もし宿泊が許されるのであれば、雲取山荘に1泊し、次の日縦走なさるのがよろしいかと思えます」「静かで趣のある尾根ですので、きっとご満足頂けるものと思えます」とお答えした。奥多摩の山の地図はすべて殿下の頭の中にインプットされておられるようであった。

平成19年10月、皇太子殿下の長沢背稜山行が実現された。峰谷の峰集落から入山し、セツ石山、雲取山を縦走。雲取山荘に宿泊し、翌日、東京と埼玉との都県境尾根である長沢背稜を縦走して、七跳山から日原に下山するルートである。殿下にとって今回の雲取山は3度目の登山となる。今回は雅子さまも同行なされたが、今回はお一人であった。

当日は天候に恵まれ、セツ石山の山頂からは富士山や遠く南アルプスが見渡せた。ご説明役は役場観光産業課の原島係長であったが、私も側近で警衛に当たった。セツ石山で休憩中、殿下から私にお尋ねがあった。遠く望める南アルプス南部の山を指さされ、山名を尋ねられたのである。私は「左の三角の山が聖岳で、その右隣のどっしりした山が赤石岳です」とお答えしたところ、すかさず殿下は「そうするとその右が荒川三山ですね」とお尋ねになる。「その通りです」とお答えすると「懐かしいですねえ、学生のころテント泊で縦走しました」と、じっと感慨深そうに眺めておられた。

雲取山頂ではあいにく霧が出てきて、晴れていれば見えるはずの奥秩父の山々、南アルプス北部の山などが見えないのが残念であった。

雲取山荘に到着し、殿下は古くから面識のある山荘の主人、新井信太郎さんと懐かしそうに話が弾んでおられた。夕食時、殿下の侍従の方が私の所に来られ、「殿下の隣の席で食事をして下さい」と言う。私は「とんでもありません、警視庁警衛課の上司や、皇宮警察、東京都などのお偉い方が沢山おります」と言う

「殿下がそうお望みなのですから」という。恐れ多いことではあるがお受けすることにした。

夕食は食堂で当日の警衛陣、一般の宿泊客とも同時にとることになった。私も一番奥の窓側の席で殿下をお迎えした。殿下がお席に着かれ、殿下の向こう隣は侍従さん。前の席はご説明役の役場の職員などであった。食事は特別な料理などはなく、殿下のご要望どおりいつもの山荘の夕食、ハンバーグライスであった。私は殿下と私の故郷の山、飯豊や朝日連峰の話などしながら食べたが、たぶん私は相当に固まっていたものと思う。それでも殿下はご飯のお代わりもなさり、リラックスして明日の長沢背稜行を楽しみにされておられるようであった。

翌日も天気は良かった。雲取山荘前において佐藤隊員の号令で準備体操をして出発した。芋ノ木ツケを登り長沢背稜に入った。右は東京都、左は埼玉県の都県境尾根である。日原川の支流である長沢谷を長沢山南面に発源とすることから、これを取り巻く長い尾根を「長沢背稜」と呼ぶものであろう。この名にもいろいろな論議があるようであるが、ここでは東京都公園協会発行の登山地図に従う。

桂谷ノ頭、長沢山、水松山と、穏やかな初秋の天候の中、静かな長い尾根歩きは快い汗を流すことができた。休憩することに殿下は「いい山ですね」とか「素晴らしいコースですね」などと私にお話しになる。以前私が「ぜひ長沢背稜をお歩き下さい」と殿下にお勧めしたことに気を遣って下さっているのだろう。

西谷山頂で昼食後、さらに東進し七跳山から小川谷林道に下山した。何のアクシデントもなく2日にわたる長い山行を終えることができ、みんな「ホッ」としていた。

殿下から山岳救助隊にお言葉があるということで、隊長以下十数人が一列横隊に整列した。皇太子殿下は一人ひとりの目の前にお立ちになり礼を述べられた。隊長の次、私の前にお立ちになり「大変素晴らしいコースで、良い山行ができました。ありがとうございました」とのお言葉を頂いた。私も緊張しながらも「お疲れ様でございました。またぜひ奥多摩にお越し下さい」とお答えすると、にっこりと頷かれた。殿下にもご満足頂けた山行であったと思う。

平成20年の3月で私は定年退職であった。一旦退職して再任用というかたちで、現在の職のまま1年延長して頂いた。その年の暮れ、奥多摩交番に在所していた私のところに、青梅警察署の鎌田署長から電話が入った。その内容は、先ほど大分県の県警本部長か

ら鎌田署長宛に電話があり、現在公務で大分県を訪れている皇太子殿下が、会食の席で県警本部長とお話の折「警視庁の青梅警察署に、私の登山の際お世話になった、こんさんと言う山岳救助隊員がいます。もうすぐ定年だと聞いていましたが、もう退職されませんか」とお尋ねになられたという。それで県警本部長が鎌田署長に「こんさんは定年退職されましたか」と電話で問い合わせて来たのだという。鎌田署長は「今年3月に定年になりましたが、再任用で今までどおり山岳救助隊で頑張っております」と答えておいたというものであった。私は「大変ありがとうございました」と電話を切ったが、明らかに私は興奮していた。皇太子殿下が公務で遠い大分の地に赴き、一介の警察官の定年退職の心配までして頂いたとは。私はすっかり感動し、長年山岳救助隊をやってきて本当に良かったと思い、もういつ辞めてもいいとさえ思った。有り難いことであった。

皇太子殿下は、平成19年の長沢背稜登山以降奥多摩にはお見えになられていない。ご高齢であられる天皇陛下の体調不良、昨年11月の気管支炎などによる入院、今年に入って心臓の冠動脈バイパス手術での入院などと重なり、国事行為臨時代行や名代としての公務も増えておられるのであろう。忙しい時にこそ、奥多摩の山でお心を癒して頂きたいと切に思うのだが、そうもいかないものであろう。

私は平成21年3月で警察官の身分は終り、今は嘱託員として山岳救助隊に残っているのだが、これもあと1年、来年の3月で終了する。平成2年に希望し青梅警察に赴任して来て、23年間もお世話になる。その間、山岳遭難救助一筋にやらせて頂いたし、その成果も上がったと自負している。若手の山岳救助隊員も育てている。今まで自分の年齢も考えず、出過ぎた感もある。この最後の1年は全てを後輩に任せ、部隊の最後尾に付いて行こうと思っている。

心残りが1つある。平成22年11月、御前山に登って行方不明になっている男性、Aさん(76歳)がまだ見つからないのだ。駅のモニターや登山者の目撃証言などで、御前山に登っていることは確認されている。執拗な捜索にもかかわらず発見できず1年半となる。私の最後の1年はAさんの捜索を最重点としよう。

釀酒や枯るるもいいなと思ふ夜

(青梅警察署嘱託員 山岳指導員 金 邦夫)

奥多摩昔語り

奥多摩の地名(25)

峰谷川に沿って広がる「峰」「奥」「下り」の集落は、江戸初期は峰村とっていましたが、後に尾根越の留浦村に編入されました。組織的には、峰組三組と呼ばれ、留浦本村の分村的形態をなして、正式には年寄役ですが、名主のような地位の家が峰にあり、この谷をまとめていました。家号を「おめい」といい、奥多摩地方では、名主の家を指して「お前」「おめい」と呼んでいます。

この三組は、谷の底に「下り」があり、谷の奥の上方に「奥」が、「下り」から左へ上がった所に「峰」があります。この地名は、「おめい」の住居がある「峰」を中心に付けられています。峰は山の頂や高所を指す言葉で、集落のある字名は「峰平」といい、その上部に「峰」があります。

「下り」の集落には、「大指(おおさず)」という川野の飛地があり、この言葉は、大きな焼畑のことをいいます。「大指の山林に、寛正年代(1460~1465)の板

碑(青石塔婆)があり、真ん中に五分ぐらいの穴が空いていました。昔、峰村の某が、夕方東の空を眺めていると、怪しい光が見えたので、傍らにあった鉄砲でそれを撃ったところ怪しい光は消え失せましたが、後になって、その場所へ行って見たところ、穴の空いた板碑があった。」といひます。

「下り」のはずれには、高さ4mから落下して、時計回りに渦を巻く幅4mの大滝があり、雨降り滝とも呼ばれています。ここは、昼なお暗き滝壺で、滝の飛沫を雨にならずらえて「雨降り滝」と名付けたのではないかと思います。

「むかし、旱の時には、村中総出でこの滝を取り囲み、大勢の村人が滝壺に竹竿を突っ込んでかきまわし、主の籠を怒らせて雨を降らせた。」といひます。

普段の生活の中での、慈雨ばかりでなく、時には、何がなんでも降ってもらいたい気持ちが分かる逸話です。

【資料】 奥多摩町誌、広報おくたま

(郷土史研究家 岡部義重)

奥多摩歳時記

ケヤキに異変?

皆さんは、昨年晩夏から初秋にかけて、ケヤキの葉が濃い茶色に変化した現象に気付かれたでしょうか。ちょうど、福島原発の爆発事故に端を発したセシウム汚染で世の中が騒然としていた時期と重なったこともあり、このケヤキの現象に心配された方もおられたのではないのでしょうか。

私が眼にしたケヤキのほとんどは、自然樹形でした。そのケヤキで、紅葉の季節を待たずに葉の変色が始まり、木そのものが枯れたのではないかと思うほどの姿になったのです。

私の知識にはなかった現象でしたので、初秋のある日、テニスコート脇のケヤキを観察してみました。すると、僅かではありますが、少し紅葉が始まった葉もありました。しかし、多くの葉が枯れた状態で変色していたのです。そして、小枝ごと落ち始めていました。さらに細かく観察すると、変色していた葉の大きさが正常な葉の4分の1程度しかありませんでしたし、その色も、本来の紅葉とはほど遠い色でした。

しかし、いろいろと調べてみると、これはケヤキの

豊作年特有の現象だったのです。

日本ではケヤキだけに見られる現象のようですが、ケヤキはその種子を「結果枝」と呼ばれる、葉の付いたままで落とす枝に付ける、と言う変わった方法をとるのだそうです。葉を付けたままで枝を落とすことにより、種子をより遠くへ飛ばそうとした戦略なのでしょう。でも、それにしても、葉の量が多すぎて重いと感ずるのですが。

豊作年でなければ、その結果枝の量も少ないので、あまり目立つこともないのですが、昨年は、豊作、それも大豊作だったことから、変色した結果枝ばかりが目立ち、木全体が枯れたように見えたものです。

この現象は、並木や公園内のケヤキ、それも数年以内に強度の剪定をした固体では見られなかったようです。それらの固体では、樹勢回復のため、まず、枝葉を張ることに精力を使い、精力の消耗が激しい結実を避けたからなのでしょう。

通常の葉を付けた生育枝が少なかったため、今年の新葉の展開が気になるようです。(堀越弘司)

ガイドだより

『むかしみち』 ～中山からのコース～

奥多摩湖行きのバスを中山で下車。進行方向の右手を見ると、ちいさなトンネルが見える。この道に入って少し登ると正面に家が見える。ここで家につき当たった道は、左に登っていく。道は、さらに右に左に折れ曲がりながら登っていく。

この道は、中山集落へ登る生活道路だが、傾斜がきついのでゆっくり登ろう。

15分ほどで車道に飛び出し、そのまま登ると中山集落に着く。ここで、むかしみちと合流する。

さらに登ると、正面に奥多摩湖が見えてくる。右上には浅間神社が見えている。ここより本格的な山道になる。左側は垂直に近い傾斜であり、注意が必要。山腹を通る道だが、春先にはスミレやジュウニヒトエ等が咲いている。

浅間神社より30分ほどで滝のり沢を渡る。ここは、イワタバコの群生地、花期には一見の価値あり。

道はこれより最後の登りとなる。青目立不動尊(奥平家)の手前で再び奥多摩湖が見えてくる。

むかしみちから左に外れ、奥平家へと続く石段を登る。左手に不動尊拝観の料金所があり、300円で資料館見学と不動尊(下図参照)の拝観ができる。休み処で軽食や喫茶をすると、拝観料は無料となる。ここからの奥多摩湖の展望は一見の価値あり。

庭を抜けて広い車道に出る。そのまま下っても良いが、右上に少し登ると、左に水根観音を経て、水根集落へ降りて行ける。杉木立の中を集落に下る道にぶつかったら左下に降りる。この辺りはジギタリスが植えられている。

その道を下り切ったら左へと道をとると車道に飛び出す。少し歩くと広い車道と合流する。少し先に、水根沢に降りる歩道の道標がある。この道は、水道局が作った「ふれあいのみち」で、舗装道路を歩くことなく、間近に沢の流れを見ながら、国道まで行ける遊歩道である。

国道に出れば、水根バス停まであとわずか。少し石段を登れば、奥多摩湖バス停も近い。

春先に歩けば、花を見るコースとしては最適。

(杉浦真明)

施設案内

「創作料理 どんぐりんこのテラス」

おもわず誰かに話したくなる…

おっきなパンの「どんぐりんこピーフシチュー」

とてつもなくなが〜い「おきたまどんぐりんこドッグ」など。

多摩川の優美な景色を眺めながら、びっくり料理をどうぞ！御嶽駅と川井駅のほぼ中間にあります。

電話 0428-74-9515

住所 西多摩郡 奥多摩町 川井 54-1

HP <http://dongurinco.blog109.fc2.com/>

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、春から夏に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

- ① 5月11日(金) 奥多摩三山シリーズ②大岳山
応募締切日 4月20日(登山・健脚)
- ② 5月16日(水) 岩茸石山から名坂峠へ
応募締切日 4月25日(登山)
- ③ 5月18日(金) 新緑の奥多摩湖右岸を歩く
応募締切日 4月27日(ハイキング)
- ④ 5月25日(金) 新緑の森への誘い(体験の森)
応募締切日 5月4日(ハイキング)
- ⑤ 6月1日(金) ゆっくり・じっくり植物観察
応募締切日 5月11日(ハイキング)
- ⑥ 6月6日(水) 鷹ノ巣山
応募締切日 5月16日(登山・健脚)
- ⑦ 6月12日(火) 奥多摩三山シリーズ③三頭山
応募締切日 5月22日(登山・健脚)

募集人員：各回30名 参加費：700円

次号発行予定：平成24年7月15日

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会